

令和8年度第1回富山県農政審議会の概要

1 日 時 令和8年6月1日（月） 10:00～12:15

2 場 所 富山県民会館8階バンケットホール

3 出席者 委員20名、代理出席2名（委員数24名）

4 あいさつ（西副知事）

- ・4月1日付で富山県副知事に就任。農水省時代、畜産局にも勤務した経験があり、本日「牛乳の日」に皆様と一緒に牛乳をいただけること大変うれしく思う。また、日頃から本県農政にお力添えいただき感謝申し上げます。
- ・昨年12月に策定した富山県総合計画では、農林水産業の10年後の目指す姿を、「生産性が高まり、多くの県産品が国内外で販売されることにより、収益力の高い担い手に選ばれる魅力的な産業」と位置付けている。
- ・総合計画と並行し改定に着手した新たな富山県農業農村振興計画については、昨年11月に開催した前回の審議会において、農業者の皆様などからのご意見を反映した骨子案を、ご審議をいただいたところ。
- ・本日は、これまでの議論を踏まえた計画素案について審議いただく。これからの「食」を担う若い世代が明るい未来を描ける計画となるよう、それぞれの立場から忌憚のないご意見・ご提言をいただき、前向きな議論をしたい。

5 議事

（1）会長あいさつ（関司会長）

- ・先週末、岡山県の中山間地域に、ゼミ生とともに水路掃除で汗を流してきた。中山間で、U字溝が入らないようなところもある中で、学生が汗を流して地域の皆さんの米づくりの大変さや努力をひしひしと感じながら、昨年のお米を美味しくいただいた。
- ・これから、米づくりが本格的に進み、中東情勢の影響で資材の高騰など不安が尽きないところであるが、実りのある秋が迎えられるように私も見守っていききたい。

（2）新たな「富山県農業・農村振興計画」の素案について

（資料1、3を中心に農林水産企画課課長から説明）

- ・策定の背景となった社会情勢の変化について（人口減少・少子高齢化や災害の頻発・激甚化等）
- ・基本理念「とやまのウェルビーイングの礎「食・農・里」を次世代へ」
県民全体で一緒に次世代へつなぐという思いを込めた。
- ・6つの主要施策と、それに対応した目標指標の設定について説明

(3) 委員の主な質問・意見

- ・今日は牛乳の日。加えて6月は牛乳月間。全国で業界が盛り上がっているので注目してほしい。
- ・富山県の酪農は全国から見て衰退している地域で、他の畜産業も活発な地域ではないが、「ウェルビーイングの礎」として畜産業が果たす役割は大きいと考えている。
- ・安全・安心の言葉の意味が次のステージに進んでいる。各農家疲弊している状態ではあるが、安全なものが、安定した価格で安定した量が市場に回ることを消費者は求めている。
- ・直近の情勢を見ていて、地域の資源を使って地域のために生産するという視点を盛り込む必要があるのではと感じる。
- ・栽培者の減少に歯止めがかからない。小規模な農家がやめていく。比較的大規模な経営体ではネット栽培を導入し、省力化により面積を維持できている。ただし、全てをネット栽培にはできない。
- ・種球のリレー栽培が軌道に乗れば安く種球が供給できると期待している。体制整備を進めてほしい。
- ・円安によりオランダからの種球が高騰している切り花農家への支援も必要。
- ・とやま農業未来カレッジの卒業生と話していて、卒業後の進路の悩みを聞く。法人就農では、自分がやりたいことや家からの距離などの条件のマッチング、独立就農では起業リスクを背負うということに不安がある。人数拡充と同時に、卒業後の進路のサポートが必要。
⇒「農業経営課」とやま農業未来カレッジはH27に開校し、現在までの卒業生は164名。卒業時の就農率はほぼ100%で、その後の定着率については9割程度となっている。
- ・観光業と農業との連携という方向性はすばらしい。「寿司といえば富山」のような大々的な広告プロモーションを農産物でも計画すべき。
- ・「生産」を支える機運の醸成について、スーパーやドラッグストアなど流通業者との連携は検討しているか。
⇒「農林水産企画課」県としては、県民の皆様にコスト意識を高めるような交流イベント等を展開しており、引き続き情報発信等進めていく。行政だけで実現できることではなく、生産者の皆さんはもちろん、卸の皆さん小売の皆さん含め力添えをいただきながら、一緒に理解醸成に取り組みたい。
- ・地域計画の実現に向け事業を実施。農業従事者の確保が課題。経営者は70代が多い。理論上、後継者が定年を迎える90代まで継続する必要があるがどこまで維持

できるかわからない。

- ・米価が上がって生産者は一息ついたところだが、消費者は米価を下げてほしい。合理的な価格形成への消費者の理解が重要。農業会議としても国会議員への要請等を通じて訴えていく。
- ・人口減少と少子高齢化。今後、農業者40%減少と推定されている。70代以上の人たちがやめていく。自身が務めている役員も後継者が見つからない状況で、組織自体が疲弊しかねない。
- ・儲かる農業、稼げる農業が基本にないと意欲がわかない。
- ・注目しているのが水橋地区の大区画圃場整備。基盤整備の計画で作付けの40%以上で高収益作物導入が必要。これからのスマート農業技術を導入した生産性の高い園芸生産を進めていくうえで、企業参入が一つの大きな方向性となるのでは。
- ・新規就農者の定着率はどのくらいか？辞める場合の理由は？
⇒「農業経営課」新規就農者の5年後の定着率は、80%を超えている。辞めた理由については、雇用就農の率が高い中、雇用先とマッチしなかったことなどが考えられる。
- ・主要施策3「食のとやまブランドの推進による消費・販路・輸出拡大」をしっかりとやることで、施策1（人材確保・育成と生産性向上）、2（持続可能な農業生産）、4（農山漁村の持続的な発展）、6（消費者が「生産」を支える機運醸成）にシャワー効果的に広がっていく。
- ・観光と物産は一体。その土地土地に名物を作り、輸出もしつつ、来て食べてもらう場を一体的に整備することが重要。今、富山駅前に加積りんごのアップルパイの店を考えているところ。
- ・輸出は確実に伸びていく。海外の大手チェーンの料理人たちがこられて、日本の食品・農産品の加工法やレシピを学ぶツアーを他県で実施したところ好評であった。
- ・高岡の伝統工芸品を東南アジア・中国で販売している。一方で県民は魅力を十分理解できているか。地元で盛り上がっているから海外へ持って行くのが理想。観光客を案内できるアンテナショップを地元につくってはどうか。
- ・販売金額1億円以上の経営体割合について、現状（R6）9.1%→R12:10%という目標だが、米価の上昇によりR7でクリアしてしまうのではないか。
- ・離農する人が増え、地域の中核農家に集積が進む中、大規模経営体（50ha以上）250経営体もすぐに達成されそう。一方で、農地の受け入れ側にも限界がある。
- ・人材確保のためには、優良企業と同等の給与水準、休日など改善。農業者自身が認識を改めることが必要。
- ・農業は、田植えや収穫等一時に集中した労力が必要で短時間ワークと相性が良く、自分も活用している。富山めぐりマッチボックスの周知をより進めてほし

い。

- ・スマート農業技術の導入など、平地と中山間地域が2極化していくように感じた。
- ・中山間地域の魅力は美しい景観と豊かな自然に加え、人の有機的なつながり。
- ・自分たちの地域では人手が集まるようになったが、それを周りにどう広げていくかが課題。高齢化した地元住民の方々に、外からの人の流れ作りや入ってきた人々への対応を求めるのは負担になって続かない。
- ・悩みを持つ農村を支える仕組みと人材の育成にとりくむべき。ボランティア募集にしても、地域のニーズを理解している人が運営することが重要。地域の人がいきなりはできない。伴走支援の人材養成と継続が必要。地域おこし協力隊員も期限付き。
⇒《農村振興課》伴走支援がどこまでできているか、課内で検証・検討したい。
- ・農地集積が進み、1経営体の作付面積が大規模化する中で、適期作業のため、高温耐性品種の作付比率の他、「早生・中生・晩生の比率」の目標値も必要では。
⇒《農産食品課》水稻生産振興基本方針の中で、現状の早生1：中生7：晩生2を早生2：中生6：晩生2とする目標を定めている。
- ・大豆の収量・品質向上へ従来の施肥や排水対策と異なる実効性ある対策が必要。
⇒《農産食品課》施肥量等に加え、「かん水」等について検討していく。
- ・地域経済の活性化や食料安全保障の観点から、「県産を県内消費する」しっかりとした仕組みが必要ではないか。一次産業・二次産業・三次産業を巻き込んだプロジェクトを検討いただきたい。
- ・主要施策6の農業に親しむ教育や継続的な経験の取組みにある、「小さい頃から」の記載にあたたかみを感じる。体験等を通じて得る農業への距離感の近さが職業を選ぶ時の大きな力になる。「知っている・経験している」ことが重要。
- ・10年後を見据えた計画であることが嬉しい。すぐに効果が出るわけではない取り組みもある。今、10歳の子へのアプローチが10年後20年後に実る。
- ・良いワードがたくさん盛り込まれている。「ワクワクする」は小学校でよく使われ、小学生の興味を引くワード。小中学校、高校で今盛んな「総合的な学習」や「探究活動」では、SDGsがテーマになることが多い中、「持続可能」等SDGsにつながるワードも含まれている。
- ・目標値として、富山めぐりマッチボックスの実採用人数が上げられているが、その後の就農につながった人数が重要ではないか。
⇒《農業経営課》継続的な雇用につながった割合（10%）と、求める新規就農者数30人（目標120人－現状90人）から300人と算出。県としても、富山めぐり

マッチボックスは「労働力の確保」とともに、就農の入り口になることを目指している。

- ・集落とのつながり、地主とのつながりが希薄になっている。用排水路の管理や老朽化への対応について、誰に許可をとって何をしたら良いかがわからず、費用負担の問題もある。農地を守るにはそれ以外の維持も必要。

- ・全国と比較して農地が維持されている、減少幅が少ないのは、基盤整備がしっかりされていることも理由だと考えている。

- ・中山間地域等で、3割が10年後の耕作者が決まっていない状況からすると、「中山間地域等直接支払協定締結」の現状維持という目標は大変厳しいのではないか。どのように分析しているのか。

⇒《農村振興課》中山間地域直接支払制度は、平成12年から始まり、対象となりうる農地で取り組んでいる割合は10年前に88%ほど、5年前は85%強ほどであった中、昨年度80.6%まで落ち込んできたが、中山間地の維持に向けて何とか死守したい。

- ・合理的な価格形成への理解醸成について、アンケートの結果で23.5%が「わからない」としているのは、情報が届いていないことも理由ではないか。計画に盛り込まれているように情報提供を継続していくことが重要。

- ・こども達はSDGsの流れで地産地消、農業の重要性を認識している一方、大人への理解が薄い。日本の食の抱える課題や富山県の10年後の農業の姿など、工夫しながら周知を進めてほしい。

- ・地産地消について、20～働き世代で地元産を選ぶ割合が低い。価格以外の価値観も影響している。新しい消費スタイルに合わせた地産地消のスタイルを考えてはどうか。

- ・消費者協会として、「消費者の責任」も周知していきたい。その中で、「買って食べて応援」というのはわかりやすく良い。

- ・生産と消費をつなぐ価格設定が難しくなっている。

- ・食料システム法でコスト指標が示されるが、様々な要因で日々変動する野菜の価格に対する指標の位置付けを疑問に思う。

- ・富山市の市場の取扱いのうち、県産の割合は10%しかない。このような市場は全国でも珍しい。

- ・となみ野のタマネギは全国の中でも先進事例。当初800万ほどだった出荷額が、昨年は市場で見えているだけでもおそらく5億円を超えるくらい成長している。

「呉羽なし」、「入善ジャンボ西瓜」のように地域名をつけると産地の一体感が出る。

- ・情報がポイント。いつ、いくら、どのくらいの量を示すこと。富山の中小園芸経営体には難しい。リーディング経営体に加え、地域で一体となって取り組むこ

とが必要。行政が支援すべき経営体・方向性をしっかりと定めることが必要。

- ・旧大山町で営農をしている。町の面積のうち農地は1割で、その3～4割が中山間地。畔が高く草刈りに一番労力がかかる。機械作業できるように、畔を大きくする基盤整備ができないかと考えている。
- ・最近では外部からの移住、カレッジ卒業生が加わるようになり、栽培面積下げ止まり、増えつつある。
- ・園芸でも気候変動、温暖化が問題になっている。着色不良、形態不良や春の低温による障害など。農業部門・環境部門、それぞれの研究機関が連携しながら有効な対策を打ち出してほしい。
- ・農泊登録をしたところ。田植えイベントを実施し、県外含む70名の参加があった。若い層にアプローチできたのはSNSでの発信によるところが大きい。高齢者含め、SNSでの発信へのサポートがあると良いのではないか。
- ・当初は新しいことを始めることに地域の理解が低かった。少しずつイベントができるようになってきている。
- ・地元の人には良いところを発見しにくい。地元だけで支えるのは困難。その地域を好きと言ってくれる人が、地域と外部をつなぐ人を育てることが重要。地域おこし協力隊は任期が短く信頼を得づらい。自身も10年かかった。
- ・富山は基盤整備が進み、水が豊富で農地が維持できている優れた県である。
- ・基本理念に、「食」と「農」に加え「里」が入っているのがよい。中山間の農地維持などの委員意見も踏まえ、計画の中でもう少し「里」（中山間農業振興、村づくり、基盤整備など）の記載を増やした方が良いのでは。
- ・次世代につなぐ施策をこれからも実行してウェルビーイングを達成してほしい。

【図司会長総括】

- ・生産、流通、消費、様々な品目についてご意見いただいた。
- ・暮らしていく中で、田んぼ、農地は身近にあるが、精神的な関りは遠くなっている。村作業への関わりが薄くなっている。一方で、富山めぐりマッチボックスやとやま農業未来カレッジなど入口が整えられ、農業に関わる人は増えている。距離感を縮めるにはどうしたらよいか考えていく必要。
- ・平場と中山間地域の違い。中山間の条件の厳しさに対する伴走支援、中間支援が必要。また、関係人口を仕組みの中にどう作りあげていくかが重要。

6 閉会（西副知事）

- ・農林水産部の職員挙げてみんなで知恵を凝らして考えた計画素案について、良

い言葉を使っている、視点がいいというコメントをいただいた。これから、大きな課題に、県民挙げて皆様と取り組んでいくという中で、職員としても非常に勇気づけられた。

- ・幅広く、非常に意義の深い、ご提言・ご指摘を賜った。職員とともに、私もしっかりと検討を深め、計画の策定を進めたい。